



野村 幸正 (のむら ゆきまさ)  
1947年生まれ 関西学院大学文学部卒業  
同大学院修了 現在関西大学文学部教授  
認知心理学専攻 文学博士  
1987～1988年 インドのプーナ大学へ留学

●著 書

『現代基礎心理学 4 記憶』 東京大学出版会 (分担執筆 1982)  
『心的活動と記憶』 関西大学出版部 (1983)  
『漢字情報処理の心理学』 教育出版 (海保と共著 1983)  
『サバイバル・サイコロジー』 福村出版 (井上と共著 1985)  
『知の体得—認知科学への提言』 福村出版 (1989)  
『関係の認識—インドに心理学を求めて』 ナカニシヤ出版 (1991)  
『認知科学ハンドブック』 共立出版 (分担執筆 1992)  
『生きるもの・生きること—新・心理学試験』 福村出版 (1992)  
『かかわりのコスモロジー—認知と臨床とのあいだ』 関西大学出版部 (1994)  
『臨床認知科学—個人的知識を超えて』 関西大学出版部 (1999)  
『行為の心理学—認識の理論—行為の理論』 関西大学出版部 (編著 2002)  
『「教えない」教育—徒弟教育から学びのあり方を考える』 二瓶社 (2003)  
『新しく学ぶ心理学』 二瓶社 (金敷・森田と共著 2003)  
他論文多数

野村 幸正 著

関西大学出版部

—— 生の体験から行為の理論へ ——

# 熟達心理学の 構想

熟達心理学の構想

野村 幸正 著

関西大学  
出版部



9784873544816



1923011030004

ISBN978-4-87354-481-6

C3011 ¥3000E

定価 (本体 3,000円+税)



# 熟達心理学の構想

——生の体験から行為の理論へ——

野村 幸正 著

関西大学出版部

【本書は関西大学研究成果出版補助金規程による刊行】



## 聖なる場所

晩秋の、ザンスカール河とインダス河の合流地点の光景。チベットとの国境に近いレーの郊外で撮影したものである。インドでは、二つの河の交わる場所は聖なる場所である。

レーは標高三千五百メートルを超えるヒマラヤの西北部に位置し、人口数千の、チベット仏教がいまなお息づく街である。人びとの生活は過酷であり、峠は長く雪に閉ざされるが、優しい人びとの暮らしが忘れられないのであろう、すでに四回訪れている。訪れるたびにひどい高山病に悩まされ、毎晩不思議な夢を見る。



## はじめに

七〇年代に身についた実験心理学の基本的な考えは、四〇年近く経過したいまも、私の身体の深層にあって生き続けている。八〇年代以降、私はそれを必死に流そうとしてきたのであるが。その場がインドであり、仏像彫刻であり、熟達化研究であつたのであろう。本書『熟達心理学の構想』は、そのなかで見えてきたものを私なりに体系化したものである。ただ、その体系化は心理学の伝統的な手法によるものではなく、あくまでも拙著『臨床認知科学』（一九九九）で提唱した「想起的構成と分化」によるものである。それは固有の場に身を委ね、純粹経験を繰り返し、生の体験を積み重ねてゆくうちに構築された深層の世界を、想起を介して具現（構成と分化）してゆく手法であり、本書で言及する人の働きによるものである。人の働きとは、本書では私のそれであり、決して充分なものとはいえないが、ヒンドゥーという林住期を迎えたこのあたりで、三〇年近くに及ぶ熟達化研究に終止符を打ちたいと思う。これからは、私の四〇年に及ぶ心理学への想いを違う形で表現したいと考えている。

本書でも触れたことであるが、二〇年余り仏像彫刻にかかわっていても、まともなものが彫れる訳ではない。いまさらながら熟達への道が遠いことを思い知らされたが、恥を忍んで本書の各章に私が彫り上げた仏像を年代順に掲載した次第である。それらは私のその時々々の想いの現れで

しかないが、私が目指している世界を文字から、また仏像写真とその解説から推し量っていただければ幸いである。

ところで、この四〇年を振り返れば、七〇年代に関西学院大学石原岩太郎教授に学び、以来先生は私の終生の恩師であったが、惜しくも昨年六月に九三歳の生涯を終えられた。また学会や研究会では、いまは亡き京都大学梅本堯夫教授に心温まるご指導をいただいた。それは大学とか制度上の制約を超えたものであった。両先生からは、心理学だけではなく学問の本質、教育のあり方を教えられたのである。私は関西という地で、両先生の薫陶を受けながら、また関西大学の自由な雰囲気のおかげで、ただ好きなように教育と研究に打ち込んできたように思う。感謝の念を込めて、本書を両先生に捧げたい。

また、この三〇数年に及ぶ我が生活を省みれば、妻康江は、当時の自分の仕事を擲って子育てに専念し、またインド滞在中は日本に留まって一人で三歳の息子と八歳の娘を育て、その後も、私の度重なるインドへの渡航、修行と称しての仏像彫刻、さらには過疎の村での田舎暮らしと、ただ私のしたいことをしたいようにさせてくれたのである。これらの体験はいずれも私の基底にあつて私のいまを形作っている。本書はその表出である。本書を私の最後の上梓とすることを決意したいま、ここに記して妻に感謝の意を表しておきたい。

本書を上梓するにあたって、インドの友人であり、グルジーでもあるアシヨック・ニルファールケ博士、人生の岐路においてお世話になった住宏平先生、師匠でもあり友人でもある矢野公祥

南都仏師、国際高等研究所研究プロジェクト「スキルの科学」を主催された岩田一明氏（国際高等研究所フェロー・大阪大学名誉教授）およびその研究会のメンバー、さらには話題を提供された多くの著名な研究者に感謝の意を表しておきたい。また、著者の主催する研究会の仲間であり、共同研究者でもある畿央大学の金敷大之氏、『行為の心理学』の共同執筆者である増田節子氏、さらには気鋭のインド学者である小磯千尋氏には、内容だけでなくその表現のあり方に対して、時には専門家の視点から、時には読者の視点から多くの指摘をいただいた。掲載した写真はすべて私の撮影によるものであるが、その後のパソコン上での処理に加えて、本書の校正や索引等に関しては、関西大学大学院生の富高智成、猪股健太郎の両氏の助力による。最後になるが、関西大学出版部の藤原有和氏には随分お世話になった。ここに記して感謝したいと思う。

なお、本書の研究成果の一部は、平成一九年度～平成二二年度科学研究費補助金（基盤研究（C））・課題番号 19530604・研究課題名「想起抑制における意図―行為―表象の循環に関する実証的研究」によるものである。

平成二二年朱夏

千里山にて 野村 幸 正



## 目次

はじめに

序章	1
----	---

第1章 心理学のあり方	11
-------------	----

I 八〇年代の記憶研究	11
-------------	----

1 反理性	
-------	--

2 インドへ	
--------	--

II 新たな視点	19
----------	----

1 いま一つの臨床	
-----------	--

2 スキルの科学	
----------	--

第2章 行為	31
--------	----

I 行為の理論	31
---------	----

1 行為とは	
--------	--

2 認識の理論から行為の理論へ	
-----------------	--

## II 生の体験 ..... 38

### 1 現実感

### 2 暗黙知

## 第3章 身体 ..... 53

### I 生ける身体 ..... 53

#### 1 拡張された身体

#### 2 潜在的志向性

### II 自己 ..... 60

#### 1 自己の二重性

#### 2 受苦

## 第4章 熟達者 ..... 71

### I 熟達化 ..... 71

#### 1 五つの階梯

#### 2 内部観測による階梯の内実

### II 熟達者 ..... 79

#### 1 真の熟達者

## 2 熟達のパラドックス

## 第5章 熟達心理学

### I 現状

91

#### 1 課題

#### 2 新たな機運

### II 方法

99

#### 1 自己省察

#### 2 こととする

## 第6章 仏像彫刻

109

### I 仏像彫刻の工程

109

#### 1 部分から全体へ

#### 2 全体から部分へ

### II 彫ること

120

#### 1 構想力

#### 2 なぜ彫るのか



## 第7章 スキル

..... 131

## I スキルとは何か

..... 131

## 1 定義

## 2 関係としてのスキル

## II 獲・活・伝・創サイクル

..... 139

## 1 スキルの内実

## 2 分析と構成

## 第8章 分析による行為の生成

..... 151

## I 行為の観察

..... 151

## 1 分析—記述

## 2 関係の先行性

## II 分析から行為へ

..... 161

## 1 初心者—熟達者モデル幻想

## 2 幻想の克服

## 第9章 分析を超えた行為の生成

### I 同調する世界

#### 1 カップリング

#### 2 道具の組み込み

### II イナクトされた環境

#### 1 イナクトメント

#### 2 自作―自演モデル

## 第10章 透明な動き

### I 意図

#### 1 行為と意図

#### 2 場

### II なめらかな動き

#### 1 その定義と特性

#### 2 なめらかな動きと心

#### 3 未完の行為

## 第11章 境界と秩序

### I 境界

#### 1 開かれた世界

#### 2 境界とは

### II 秩序

#### 1 風土

#### 2 同時現成

#### 3 消滅する境界

## 第12章 動的過程

### I 聖と俗

#### 1 伝承

#### 2 聖と俗

#### 3 正統的周辺参加

### II 何を獲得するのか

#### 1 熟練のアイデンティティ

#### 2 二つの無心



### 3 ダイナミクな獲得

## 第13章 学びにおける拘束の意味

### I 学ぼうとする意志

#### 1 「教えない」教育

#### 2 何を教え—伝えるべきか

### II 関係性の科学

#### 1 人の働き

#### 2 「私」の真実

## 終章 新たな行為論を目指して

### I 自己に学ぶ

#### 1 行為すること・生きること

#### 2 ナレッジベースドアフォーダンス

#### 3 学びの場

### II 行為の本質

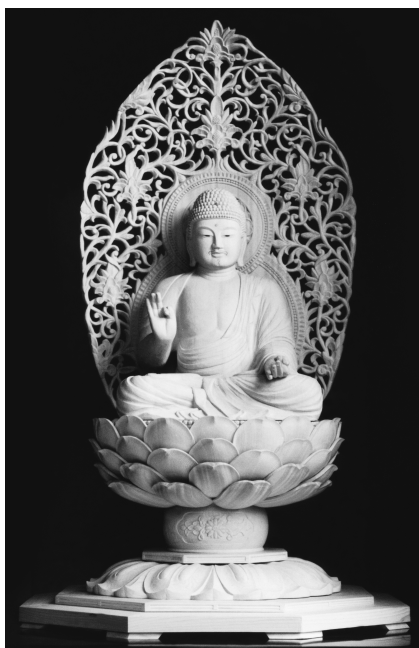
#### 1 意図を超えた行為

#### 2 カルマと無願

初出一覽	.....	289
参考文献	.....	291
人名・項目索引	.....	I

# 阿弥陀如来坐像

檜造 総高三尺三寸（平成七年作）



仏師といえば、鎌倉時代であり、運慶・快慶であろう。快慶の作といわれる浄楽寺の阿弥陀如来坐像を夢中で模刻する。彫り始めて六年が経過していた。

人からは光背の難しさを指摘されるが、難しいのは顔であり、その表情である。時間をかければ確実に彫れるところと、わざを身につけないかぎり彫れないところがあるが、その区別は経験を積んだいまもおかしい。